

東京・旗本岩瀬家屋敷跡（新諏訪町遺跡）

はたもといわせけやしき

所在地 東京都文京区後楽二丁目

2 調査期間 一九九二年（平4）一月～一九九三年三月

3 発掘機関 文京区遺跡調査会（文京区教育委員会）

4 調査担当者 加藤元信

5 遺跡の種類 遺物散布地・旗本屋敷跡

6 遺跡の年代 繩文時代、近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、民間による開発事業に伴う発掘調査である。調査地は「御府内沿革図書」によれば、延宝年間から享保年間（一六七三～一七三六）にかけては旗本

岩瀬市兵衛が、延享三年から天保元年（一七四六～一八三〇）にかけては旗本稻生七郎衛門が、屋敷地を押領していた土地にあたる。

8 木簡の釈文・内容

木簡二点は、人工地盤である地層中から、他の生活什器である陶

磁器・漆器類などと混在する形で出土している。

(1) 「大志崎村与左衛門

(94)×22×2.5 019

(2) 「延宝八年庚申如月八□」
〔日カ〕

146×18×5 011



（東京西北部・東京東北部）

この場所は、江戸城外堀（神田川）の飯田橋（見附）の北東部に位置しており、

外堀に設けられた河岸は、「市兵衛河岸」の名で呼ばれていた。岩瀬家は常陸国鹿島郡大志崎村を知行地とした八〇〇石の旗本、稻生家は武藏・上野・下野・下総・常陸に知行地を有した一五〇〇石の石高を有する旗本である。

調査地点は、神田川をはじめとする複数の河川が合流し、江戸前島方面へと流入する直前に「小石川大沼」を形成していた土地を、市街地化するにあたって客土して整地した地域であるため、沖積低地のシルト層直上に、砂質土や洪積台地を構成する関東ローム層の掘削土などを用いた人工地盤が形成されている。

こうしたことから、地盤沈下対策として、松杭などを二、四本を一単位として土台杭とし、これらの杭の上に礎石などを据えた上に、建物の構築部材が置かれていた。



- (1)は、常陸国鹿島郡大志崎村を意味するものと考えられる。大志崎村は岩瀬家の知行地にあたり、「沿革図書」の内容に符合する。
- (2)は、日付を記したものである。延宝八年は一六八〇年にあたる。
- (1)(2)ともに、具体的な用途については言及できないが、旗本の知行地から江戸屋敷に対して送られた年貢米などに付された付札と理解される。
- 9 関係文献
- (株)興和不動産・文京区遺跡調査会「新諏訪町遺跡」(文京区埋蔵文化財調査報告書四、一九九三年)
- (加藤元信)

木簡研究第二二号	
卷頭言—WEB版本簡データベースの公開に思う—	石上英一
一九九八年出土の木簡	概要
平城京跡右京七条一坊十五坪	内藤原京跡右京六条四坊北西坪
秋篠・山陵遺跡	大藤原京跡左京北五条三坊南西坪
飛鳥池遺跡	飛鳥池東方遺跡
飛鳥寺	飛鳥東垣内遺跡
長岡宮跡	平安京跡左京三条三坊十五町
備池	平安京跡左京吉原寺跡
七条二坊八町及び本園寺	鳥羽遺跡・鳥羽離宮跡
宮ノ前遺跡	大敷遺跡
武者ヶ谷遺跡	興戸
長保寺遺跡	大坂城下町跡
溝呂遺跡	豊岡城館
岩井枯木遺跡	河守遺跡
網干遺跡	難波宮跡
六大A遺跡	大坂城下町跡
宇津宮辻子幕府跡	河守遺跡
詰・御堀端通・町屋跡	難波宮跡
浅草寺遺跡	池之端七軒町遺跡
上浜遺跡	尾尾町遺跡
市川橋遺跡	小谷城跡(伝知善院跡)
崎遺跡	柳田遺跡群(北陸新幹線関係)
崎遺跡	柳之御所遺跡
中保B遺跡	柳田地区内遺跡群奥ノ垣内地
跡	内垣外遺跡
壱本杉遺跡	姫路駅周辺第四地点遺跡
崎遺跡	後田(旧月記)遺跡
三田谷I遺跡	柳田遺跡
電所)遺構	柳田A遺跡
新道(清輝小)遺跡	下ノ西遺跡
日市遺跡	砂山中道下遺跡
元岡遺跡群	下町・坊城遺跡C地点
一九七七年以前出土の木簡(二二)	船戸
平城京跡左京二条二坊十坪	岡山城二の丸(中国電力)
積文の訂正と追加(二二)	百間川米田遺跡
長岡京跡(二八号)	平田七反地遺跡
木簡の撮影	変川米田遺跡
今泉隆雄著「古代木簡の研究」	森上直夫
書評	井上直夫
彙報	井上直夫
木簡の撮影	井上直夫
今泉隆雄著「古代木簡の研究」	井上直夫
頒価	井上直夫
五百〇〇円	井上直夫
送料六〇〇円	井上直夫
シンボジウム「長屋王家木簡をめぐつて」の記録	井上直夫
削削からみた長屋王家木簡:渡辺晃宏、長屋王家の米支給関係木簡	井上直夫
:勝浦令子、長屋王家の経済基盤と荷札木簡:楠木謙周、討論のま	井上直夫
とめ:東野治之	井上直夫